

パネルディスカッション5：在宅における「老年症候群」の認知症、腰痛症を鍼灸にて対応

演題名	擦過鍼を使った認知症周辺症状の緩和と介護負担の軽減 —8年間のグループホームでの施術で分かってきたこと—
-------------------	---

概要

2005年4月に認知症発症の機序が小児の疳虫の発生機序に似ていると考え、小児はりを応用する認知症周辺症状改善の方法を考案。大阪市住吉区にあるグループホームで施術を始め、8年間で延べ6,048名に施術を行ってきた。皮膚を摩擦する擦過鍼を使用することで、鍼灸治療に恐怖心を持っておられる方にも、違和感なく安心安全に、衛生的に施術することができ、周辺症状緩和の大きな手段となり得る可能性を見出した。

元々小児鍼は、大阪では江戸時代の初め頃より普及し、今でも夜泣き、疳の虫の治療に多くの子供さんたちが鍼灸院に通ってこられる大阪の文化と言えるものである。

この小児鍼を応用した皮膚を摩擦する手法は、鍔鍼（又は員利鍼）・擦過鍼・ローラー鍼の3種類を使い、前腕部、眼窩縁上部、頭部、背部、時に下腿部に施術。皮膚の緊張度、発赤、発汗を目安に、鍼を刺すことなく施術する。毎週1回のペースで施術。施術前には無表情であった方に笑顔が見られるようになり、体が軽くなる。元気が出るといった前向きな感想をご本人が述べられた。介護拒否の傾向が強い方も、介護職員の言うことをよく聞くようになり、コミュニケーションもしやすくなった。意欲が出てきた。介護の負担が軽くなったという介護職員の方の評価を得た。

擦過鍼による軽微な皮膚への刺激は、血行を促し、知覚神経が刺激されることで、脳血流の増加を促し、自律神経のバランスが整えられる体性－自律神経反射の作用である。それによって、ストレスを和らげ、周辺症状を改善すると考えられる。安心安全に、恐怖感なく、簡便に施術できるこの方法で、認知症の周辺症状を改善し、介護負担を減らす大きな力となり得ると確信している。

又、認知症の周辺症状のほかにも、肩のコリ、頭痛、腰痛、食欲不振、だるさ、うつ傾向といった不定愁訴も併せて解消できることも大きな利点となる。

体の訴えを解消し、意欲を引き出すことで、QOLを向上させることができることから、在宅医療に不可欠な手法になるのではないかと考えている。